

青年中年高年の箱庭における初発時間，制作時間 および使用玩具総数 — その年齢差と性差について —

石垣明美*¹ 進藤貴子*² 島田 修*²

要 約

本研究では，岡山市および倉敷市に住む一般の青年・中年・高年の男女，計58人に箱庭を制作してもらい，初発時間 (a) と制作時間 (b) と使用玩具総数 (c) に対する年齢差と性差による効果について検討した。

独立変数は年齢層 (青年・中年・高年) と性別とした。統計的検定の結果，(a) と (b) では年齢層と性別による効果は見いだされなかった。(c) では年齢層要因で効果は見いだされなかったが，性別要因で女性の方が有意に多かった。(c) の平均値の男女差は，青年と高年に比べて中年では著しく小さかった。

また，先行研究で報告されている児童期から青年期を対象としたデータと比較検討した結果，(a) では不連続的，(b) と (c) では連続的であった。

(a) と被験者の精神的状態の関係，また，(b) はどのように消費されたか，そして，(c) とライフサイクルとの関連性について考察した。

はじめに

1. 先行研究

これまでの箱庭の基礎的研究分野では，岡田(1981)¹⁾ や木村(1997)²⁾ (1985)³⁾ の研究が見られるが，これらはいずれも幼児期から青年期までが対象であり，中高年を対象とした基礎的研究は見あたらなかった。

しかし，事例研究では中高年に箱庭療法を適用した報告が少なくない。また，そのような事例研究が積み重ねられ，成人の箱庭の特徴が論じられるようになってきた。西村(1997)⁴⁾ は，「中高年に関しては発表された資料が大変少ない。〈中略〉30歳代40歳代の箱庭の特徴は十分につかまれている」と述べながらも，西村の今までの豊かな経験とこれまでに発表された事例研究の箱庭の例から「成人の箱庭には〈中略〉山や森があって，村や街があり，神社やお寺があり，牧場や農場などの働くところがあって，そして，必ずと言っていいほど海岸のリゾートがあって〈後略〉」と述べるなど，中高年の箱庭の特徴と傾向について具体的に論じている。また，木

村(1997)²⁾ も，発達段階による箱庭の諸相と題して「身体発達のように一般的な傾向として固定したモデルを示すことはできません」とした上で「大きく見ると，年齢が進むにつれて表現できるようになってくるもの，特定の発達段階に特徴的な使用玩具やテーマ，制作行動の特徴など，ある程度の傾向が見られることも事実です」と述べている。

木村(1998)⁵⁾ は，多くのデータを収集するリサーチについて「治療者の視野を広げ，必ず多くのヒントを提供することになると考えている」，「成人から老年期にかけてのデータが今のところ不足しているので，そのデータがほしい」と述べ，中高年についての基礎的研究の必要性を強調している。

2. 本研究の目的と意義

(1) 成人の箱庭の基礎的研究の意義

臨床場面で治療者は，クライアントの箱庭表現のなかの個別性を見て取ることが求められる。しかし，西村(1997)⁴⁾ や木村(1997)²⁾ によれば，年齢や性別によって箱庭の中に表現されるものや使用玩具が変わってくるという。そうならば，クライアントの個別性は，年齢や性別による要因を考慮して考えら

表1 被験者の構成

群	人数	平均年齢	標準偏差	最長	最少	職業	
青年	男性	10	21.2	2.9	26	17	高校 1 大学 1 有職 5 無職 3
	女性	10	22.3	1.0	24	21	大学 7 有職 3
中年	男性	10	44.2	4.4	53	38	有職 10
	女性	10	42.1	2.7	48	39	有職 4 無職 6
高年	男性	8	70.5	5.5	83	63	有職 1 無職 7
	女性	10	69.6	2.8	73	65	無職 10

れなければならない。したがって、これらの要因が、箱庭作品にどのような傾向として現れてくるのかを明らかにしておくことは、重要である。

本研究は、年齢と性別による要因が箱庭制作への態度や箱庭作品に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

(2) 初発時間、制作時間、使用玩具総数を検討する意義

初発時間や制作時間は被験者の箱庭に対する態度として、重要な指標となることは今までも論じられてきた。また、使用玩具総数は、その箱庭作品のイメージに大きな影響を与えるであろう。したがって、これら3変数は、箱庭表現の基本的な変数といえる。

一方、幼児期から大学生までを対象としてきた先行研究の結果と比較検討することで、これら3変数の幼児から成人までの連続性についても検討できる。

方 法

1. 実験法の特徴

箱庭の実験には、箱庭セット内容、実施場所、実験者と被験者の関係、教示内容など、実施条件によるバイアスがかかってくる。本実験では、これらの実施条件の統制を試みた。実施条件について記述する。

2. 箱庭セット

(1) 内容

木箱の内のは57×72×7cmで、内側色はライトブルーであった。砂は白色傾向の浜砂で、体積は6.2リットル、箱に入れたときの深さは2.2cmであった。玩具総数は407個で、種類別個数は「人」49種67個、「動物」69種116個、「植物」12種46個、「建造物」32種91個、「乗り物」12種37個、「その他」22種50個とした。今回の実験では、天井効果を避けるため同じ玩具を相当数用意した。また、被験者の目が全ての玩具に平均に届くように、被験者を取り囲むかたちで階段状に配置した。

(2) 箱庭セットの管理方法

箱庭セットは、作品の正確な記録ができるように、玩具すべてに番号をつけ、実験期間中に玩具内容、提示配置が変わることがないように管理した。

3. 実施場所

一般民家内にある8m²の板間つき8畳の和室(箱庭専用の部屋)

4. 実施期間

1999年5月から8月

5. 実験者と被験者

西村(1997)⁴⁾は、寺と隣接した施設での高齢者の箱庭には、寺と隣接していない施設での高齢者の箱庭よりも、「寺」がよく置かれたと述べている。そこで、本実験では対象を、特定の環境や職業などに偏らない一般成人とした。

実験者は筆者であるI、被験者は岡山市と倉敷市に住む、健康で日常生活に支障のない青年中年高年の男女である。学校保護者会、公民館、放送大学を通じて実験への参加を依頼した。被験者全員が箱庭制作ははじめてで、箱庭に関する基礎知識は持っていなかった。年齢構成は表1に示したとおりである。

6. 実験計画

被験者群は6群(年齢層3水準・性別2水準)で、各群の被験者数は10人とした。従属変数は、初発時間、制作時間、使用玩具総数である。使用玩具番号、箱庭作品のスケッチ、写真、スライド写真、被験者自身による作品の説明を記録した。最後に、感想を聞くアンケート調査をインタビュー形式で行った。アンケートは、島田・石田(1991)⁶⁾が作成したアンケート用紙を参考にして、新たに作成した。

7. 手続き

被験者に箱庭の概略を書いた依頼書を渡し、制作日時の約束をかわした。

被験者が入室してから、最低限のラポールのために雑談風に話しながら、箱庭についてどの程度知っているのかなどの基本情報を収集をした。教示では、自由に自分の世界を作ってほしいこと、うまい下手、良い悪いなどの評価はされないこと、制作時間に制限はないことを伝えた。

教示を行ったあと「では、よろしくお願ひします」と言ってタイマーをスタートさせた。タイマーをスタートさせてから、被験者が造形を目的に砂を触り始めるか置くことを目的に玩具を手を取ったときま

表2 各群の初発時間・制作時間・使用玩具総数の平均値および標準偏差値

群	値	N=58		
		初発時間 (分)	制作時間 (分)	使用玩具総数 (個)
青年男性 n=10	平均	1.29	18.7	32.0
	標準偏差	(0.96)	(9.33)	(15.9)
青年女性 n=10	平均	2.26	22.2	45.7
	標準偏差	(3.49)	(11.3)	(14.1)
中年男性 n=10	平均	1.59	19.5	39.0
	標準偏差	(0.98)	(6.82)	(6.81)
中年女性 n=10	平均	1.02	21.5	40.6
	標準偏差	(1.23)	(8.24)	(16.2)
高年男性 n=8	平均	3.23	19.5	29.0
	標準偏差	(3.43)	(9.39)	(18.1)
高年女性 n=10	平均	1.60	27.6	46.9
	標準偏差	(1.24)	(13.2)	(17.0)

での時間を記録して初発時間、この時から制作し終わるまでの時間を記録して制作時間とした。

完成後、スケッチをとり、被験者に作品の説明をしてもらった。意味があると思われる玩具については、その意味を質問した。その後、作品に題名をつけてもらい、アンケートに沿ってインタビューを行った。

8. 結果の整理

初発時間、制作時間、使用玩具総数について、対応のない2要因（年齢、性別）分散分析を非加重平均法で行った。作品の説明や実験者との会話の記録およびアンケート結果は、見いだされた効果の意味を考察する参考とした。

結果と考察

1. 初発時間、制作時間、使用玩具総数の統計結果

当初の被験者総数は60人であったが、高年男性の被験者のうち2人が初発時間内に制作することを辞退したので、集計および統計的処理にかけられた被験者総数は58人であった。各群の初発時間、制作時間、使用玩具総数の平均値および標準偏差は表2に示した。

初発時間と制作時間では、年齢による主効果、性別による主効果および交互作用は見いだされなかった。使用玩具総数では、年齢による主効果は見いだされなかったが、性別による主効果が見いだされ、女性のほうが多く使用する傾向が見いだされた。（表3）

表3 年齢層と性別による効果の検定結果

要因	初発時間	制作時間	使用玩具総数
年齢層	n.s.	n.s.	n.s.
性別	n.s.	n.s.	*
交互作用	n.s.	n.s.	n.s.

* P<.05

2. 初発時間について

本研究で得られた平均初発時間は1.78分（107秒）で、年齢および性別要因の効果を受けなかった。岡田（1981）¹⁾が報告している幼児から中学生の初発時間の平均値は33~49秒で、群間の顕著な差は報告されていない。それぞれの研究で年齢によるちがいが見いだされなかったが、両研究で報告された値を比較すれば、成人を対象とした今回の実験のほうが、初発時間は明らかに長い。ロールシャッハテストの初発反応時間が、子どものほうが短い傾向にある⁷⁾ことと一致する。成人を対象とした本実験ではほとんどの被験者に、初発時間内に短時間ではあるが玩具を眺めながら考え込む様子が観察されたことから、子どもにくらべて成人の初発時間が長いのは、制作方針がある程度固まってから置きはじめるためではないかと考えられる。ただし、成人でも初発時間が1分（60秒）以内と短い人が58人中15人おり、最短は、18秒であった。

初発時間が何を意味しているかについて、岡田（1981）¹⁾は、片口がロールシャッハテストにおける初発時間について「初発反応時間は、正常成人の場合、普通30秒以下であり、あまりに大きいときには心的機能の低下、防衛的、警戒的態度、情緒的抑制や鬱状態などを疑ってみる必要がある」と述べていることを示し、箱庭の初発時間は制作への心の準備、構想のための時間などを意味するから、30秒以上は必要と思われるがあまりに長い場合は、片口が指摘するロールシャッハテストの意味と共通するかもしれないと述べている。

本実験では、青年女性1人が12.5分、高年男性2人がそれぞれ8分と10分で、他の被験者から逸脱した値となっていた。その青年女性1人は、制作後のインタビューで「非常に抵抗があった」と述べた。制作中もつらそうな様子が観察された。制作するこ

と自体への抵抗感があり、防衛的で心的活動が硬直していることを伺わせたが、完成した作品には比較的直接的に葛藤が表現されていた。一方、高年男性の2人は「慣れないことをして苦になった」と述べ、自分とかけ離れたイメージの数々の玩具が並んでいたことへの拒否感が強かったことを強調した。先にも述べたように高年男性2人が初発時間内に「とくに子どもっぽいカラフルな玩具に拒否感がある」と制作を辞退した。

これらのことから初発時間が長いことは、何らか抵抗感を意味することが考えられる。本実験では上記3人以外の被験者は全員が4分以内であったことから、およそ5分を越える場合は初発時間が長い傾向にあると判断して良いだろう。抵抗感の理由については、制作すること自体への抵抗か、用意された玩具への抵抗か、セラピストへの抵抗か、または新しい体験場面での動揺によるのかなど、事例ごとに検討する必要があるだろう。そして、臨床場面においては、やはりロールシャッハテストと同様に、心的機能の低下や防衛的態度、情緒的な抑制やうつ状態を考える必要があると思われる。⁸⁾

3. 制作時間について

制作時間は年齢層要因と性別要因の効果を受けなかった。性別において女性の方がやや長い傾向にあったが有意には至らなかった。

標準偏差値が大きく制作者間のばらつきが見られたが、初発時間で見られたような逸脱した値は見られなかった。各群の平均値は青年男性の18分から高年女性の27分の間に値し、おおむね岡田(1981)¹⁾、木村(1985)³⁾の幼児期から青年期にかけての正常群のデータ(およそ16分~26分)と一致した。

制作時間と初発時間との相関係数は0.18と小さく、初発時間とはあまり関連がなかった。制作時間と使用玩具総数との相関係数は0.27で、制作時間が長い人が必ずしも多く玩具を置いているわけではない。すなわち、長い制作時間は、たくさんの玩具を置く手間として経過したわけではないことを示している。

では、制作時間の長さは何を意味しているか。制作時間が比較的長く35分を越えたのは、青年女性3人、中年女性1人、高年女性2人、高年男性1人であった。この被験者らの制作の様子は、青年女性は3人とも言葉少なに黙々と取り組み、自作品への説明も簡素であった。中年女性と高年女性の3人は、ゆっくりと語らいながら作り、構成に一工夫がなされた作品を完成させた。高年男性の1人は初発時間も長かった人であり、制作中もずっと作りにくそうだったが、困りながらも誠意を尽して作ろうと努力

している様子が観察された。これらのことから、制作時間は、内的作業のために使われた場合と困惑したためと考えられる場合があるようである。

制作時間が10分以内と短かった人は4群に渡って4人おり、制作の様子は、瞬間的に沸いたイメージを集中して作られ、途中であまり迷わなかったという印象であった。

4. 使用玩具総数について

使用玩具総数は年齢層要因による主効果は認められなかったが、性別要因で主効果が認められ、女性の方が有意に多かった。平均個数は男性が33.6個、女性が44.4個であった。

岡田(1981)¹⁾では、幼児から大学生までの年齢層別の6群の使用玩具総数の平均値は、22.9個から45.3個、また、木村(1985)³⁾では幼児から大学生までの5群の平均値は40.7個から52.8個であった。木村(1985)³⁾は、岡田(1981)¹⁾の結果も含めて、幼児期から大学生までを対象に、平均的数字として約40個の玩具を使うと述べ、使用玩具総数の個人差がきわめて大きいことを指摘して、100個近いものもあったと報告している。

岡田(1981)¹⁾、木村(1985)³⁾、そして今回の調査結果から、幼児期から成人まで、年齢要因の顕著な影響はなく、平均としておよそ40個の玩具を使うといえるだろう。そして、成人においても個人差は大きく、高年女性が置いた91個が最高で、高年男性の10個が最小であった。

性別要因では女性のほうが有意に多く置いた。女性は幼いころからの遊び方や子育て経験から、玩具に違和感が少ないことが考えられるが、それだけではないだろう。今回の女性の作品内容から、自分の中のいくつもの世界、たとえば現在と過去と未来また、世代性(孫・子・自分)などを表現するためにいくつもの玩具を使用する必要があったとが考えられる。

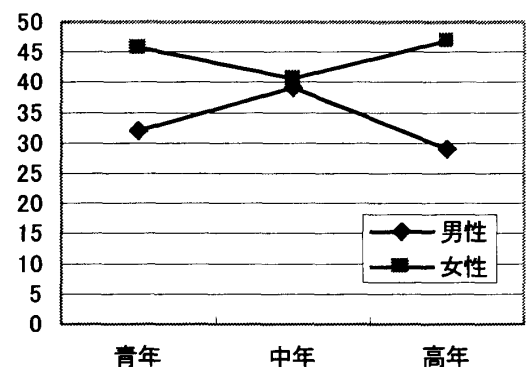


図1 使用玩具総数(個)の男女差

男性と女性の平均値の差は、青年層で13.7、中年層で1.6、高年層で17.9で、青年層と高年層に比べて

中年層での男女の差が著しく小さかった(図1)。これは、レビンソン(1978)⁹⁾が男性の中年期について「自分や他人の持つ女性的な面を楽しむ内面的な自由が増す」と述べていることと関連があると思われる。今回、女性のほうが多くの玩具を使用する傾向にあったが、中年男性が比較的多くの玩具を使ったのは、自分の中の女性的な面を容認し、楽しんでいたからではないか。中年女性は逆に自分の中の男性的な面を容認して、値が双方から歩み寄った可能性がある。一方、高年層では男女差が大きい。このことについてはコホート効果の可能性もある。現在の高年層は、男性の女性的な面と女性の男性的な面が、現在よりも明らかに強く否定されてきた世代である。彼らが中年期であったころに現在の中年層のように男女差が少なく、高年になって差が開いたとは考えにくい。

使用玩具総数がとくに多かった作品ととくに少なかった作品について、述べる。最多の作品は高年女性の作品の91個で、制作時間は17分と長くはない。自分の生活空間、娘の結婚生活空間、孫との楽しみ空間といった3つの世界が作られた。タイトルは「くらし」で人間関係豊かな暮らしが表現された。

使用玩具総数が15個以下の作品が4作品あり、いずれも男性であった。その中の1作品は青年男性で「現実には空洞があり、理想は盛者必衰」という説明が付けられた。砂が丸く掘り広げられて青い空洞が作られていた。玩具が少ないことは直接的な空虚さの表現であり、自らの空虚感と実存を問うた青年らしい作品であった。あとの3作品は高年男性の作品で、玩具を少なくすることで日本庭園風のわびさびを表現していた。この3作品の玩具を置いていない場所には、それぞれ地表に細かな文様を入れたり、地形として造形したり、造形さえも施さなかったりした。この3被験者はそれぞれ社会的に活動的な方々だが、記録した会話の内容から、自己の内面における活動の位置づけは、それぞれ違うようであった。

このように、玩具が少ないことの意味、また、玩具が置かれていない空間のあり方に、それぞれの年齢層なりのものが感じられた。玩具を置かないこともまた箱庭表現方法のひとつだと考えられ、興味深い。

呼びかけに応じて被験者となってくださった60人の方々に深く感謝する。

文 献

- 1) 岡田康伸(1981)箱庭に関する基礎的研究—年齢差を中心として—。天理大学学報,(130),10-27.
- 2) 木村晴子(1997)箱庭療法の諸相—幼児から青年まで—。発達,(71),9-17.
- 3) 木村晴子(1985)箱庭療法—基礎的研究と実践—。創元社。
- 4) 西村洲衛男(1997)中高年の箱庭。発達,(71),42-51.
- 5) 木村晴子(1998)箱庭療法の学び方をめぐって 箱庭療法に関するリサーチの可能性。箱庭療法学研究,11(1),72-77.
- 6) 島田 章,石田正子(1991)心身症者が箱庭の前に立つとき 箱庭療法学研究,4(1),3-15.
- 7) 高橋雅春,北村依子(1981)ロールシャッハ診断法I,サイエンス社,p88.
- 8) 片口安史(1974)新・心理診断法 ロールシャッハテストの解釈と研究,金子書房,p164.
- 9) Levinson D J(1978) *The Seasons of A Man's Life*. Alfred A. Knopf. (南 博(訳)(1992)ライフサイクルの心理学(上・下)講談社)

(平成12年10月18日受理)

**Initial Response Time, Working Time and Total Number of Items Used
on the Sandplay Expression of Young, Middle and Old-People
— The Effects of Age and Sex —**

Akemi ISHIGAKI, Takako SHINDO and Osamu SHIMADA

(Accepted Oct. 18, 2000)

Key words : SANDPLAY, ADULT, AGE, SEX

Abstract

This Paper is an empirical study on the effects of age and sex on sandplay expression. The subjects were young, middle and old-People living in Okayama-city and Kurashiki-city, Japan. Age (young, middle, old) and sex were set as independent variables, In 6 groups of subjects. The initial response time (IRT), the working time (WT) and the total number of items used (TIU) were set as dependent variables. The Age and sex did not significant effect IRT and WT. The Age did not significant effect TIU, but the effect of sex was significant ($P<.05$). However, the difference in (TIU) between men and women was very small in the middle groups compared to the young and old groups. In comparing these results with the results of previous studies about the sandplay of subjects ranging in age from early childhood to adolescence, a discontinuative facet was found in (IRT) and continuative facets in (WT) and (TIU). The relation between (IRT) and the psychological state of the subject, what (WT) was used for, and the relation between (TIU) and life cycle are discussed.

Correspondence to : Akemi ISHIGAKI

Master's Program in Clinical Psychology, Graduate School of
Medical Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.10, No.2, 2000 243-248)